

日本語の接尾辞「一的」の意味論および統語論的一考察

呉人 恵・趙 虹

1. はじめに

日本語の接尾辞「一的」は、明治初期、西洋の諸学術書を翻訳する際、英語の形容詞の語末に現れる-ticの訳語として中国語から借用したのが始まりと一般に考えられている（広田1969：286，堀口1992：71）。その後、「一的」はその意味と用法を変化させることによって、急速に日本語の中に定着し、書き言葉ばかりでなく、話し言葉においても頻用され、活発な造語力を見せるようになった。

この日本語の「一的」は、中国語を母語とする日本語学習者にとって、習得しにくい要素の一つである。どのような時にどのような語に「一的」が付き、どのような意味上のニュアンスがあるのかを理解するのは必ずしも容易ではない。例えば、なぜ「健康的」という語があるのに、「単一的」とは言わないのか。また、「健康な/だ」と「健康的な/だ」のように、「一的」が付かない形と付く形の間にはどんな意味上の違いがあるのかなどは中国語を母語とする日本語学習者を戸惑わせる問題である。

そこで、本稿では「一的」に関する先行研究とそれぞれの問題点を整理したうえで、「一的」が付く語基の諸特徴、「一的」が付く結合語の文中における用法を分析し、「一的」の統語的用法・意味・機能の違いを包括的に説明できるような新たな分類を試みる。この試みは言語学的な意味を持つだけでなく、中国人日本語学習者に日本語の「一的」を正しく習得させるための基礎研究という意味も持つ。

2. 日本語の接尾辞「一的」に関する先行研究

日本語の接尾辞「一的」に関しては、これまで主に次のような視点から調査と考察が行われてきた。まず、「一的」の発生の経緯については、山田（1961）、広田（1969）、堀口（1992）などの考察がある。また、「一的」の意味・用法あるいは造語機能については、藤居（1957、1961）、遠藤（1984）、加納（1991）、堀口（1992）、山下（1999）などで分析が行われている。以下では、このうち、「一的」を意味の面から分析した遠藤（1984）、「一的」をその機能を基準として分類している山下（1999）、結合語の統語的用法の違いを基準に「一的」の分類を試みている堀口（1992）を取り上げ、それぞれの論点と問題点を検討する。

2.1. 遠藤（1984）の意味による四分類とその問題点

遠藤（1984：131）では「m的N」（m:修飾語，N:名詞）における「m的」のNに対する意味を基準に、「一的」が四分類されている。以下，遠藤（1984：131-132）の分類を示す。

(1) 1. 「…に関する」	例： 芸術的才能	質的な問題
2. 「…のような」	例： 病的な神経	破壊的思想
3. 「…の状態である」	例： 圧倒的な勝利	徹底的に批判する
4. 「…としての， …である」	例： 職業的軍人	今日的意義
	科学的事実	

1のm「芸術的」はN「才能」を限定している。この才能は音楽的才能でもいいし，実業家的才能でもいい。そうした才能を限定するものの一つが「一的」の派生語であると遠藤は解釈している。2は修飾される語句の性質・特徴・程度などを「一的」の派生語が示すのであって，mは被修飾語句Nを表現する一つの比喩である。3においては，mはNの存在する場面，状況，背景などを表わすものである。4のmとNは同格関係にあり，Nはmと一体化している。

遠藤（同上）の考察は，「一的」の用法を概観し，包括的な分類を試みた点で優れていると言える。特に，m=Nのような同格関係を表す4を独立に分類し，これがその他のどの分類にも入らないとしている点が注目される。ただし，4の例として，「今日的意義」が挙げられているが，「今日的意義」における「今日」と「意義」は果たして同格関係にあるのだろうか。「今日=意義」でもなく，「今日である意義」でもない。「今日的意義」は「今日における意義」と考えたい。また，「科学的事実」の「科学」と「事実」が同格的であるという議論にも無理があるように思われる。

また，複数の「一的」の分類にまたがる意味用法の存在については，遠藤（1984：132）自身も認めているところである。例えば，「男性的欲望」の「男性的」は，その「欲望」の所有者が女性であった場合は「男性のような欲望」という上記の分類2の意味になる。一方，「欲望」が男性本来のものであった場合は，「男性としての欲望」という分類4の意味になる。このように，「一的」の意味は個人解釈，または文脈に依存するところが大きいため，意味による分類には問題が多い。

2.2. 山下（1999）の機能による三分類とその問題点

山下（1999）は，「一的」が前接語Aと後接語Bを結合するにあたってどのような役割を果たしているかという観点から「一的」を3種類に分類している。以下，山下（1999：33-35）の分類を示す。

- (2) 1. 「一的」が前接語Aの表す属性概念で後接語Bを限定する役割を果たす。

この場合の「A的B」は、Bの属性が「A的」だと限定され、その基底の意味構造が「BがAの性質を有している」「BがA（の/する）状態である」になる。

例：現実的政策・階層的思考・弾力的判断・慢性的資金不足

2. 「一的」が比喩を表す助動詞と同じ役割を果たす。

これは「A的B」を「AのようなB」と言い換えることができるものである。

例：家族的雰囲気・食堂的イメージ・カリスマ的指導者

3. 「一的」がある種の助詞や複合辞や語連続と同じ役割を果たす。

「一的」が「AにおけるB」「AとしてのB」「AについてのB」「Aに対するB」など多様な意味を担っている。

例：時代的要請（時代における要請） 生理学的研究（生理学における研究）

宗教的感情（宗教に対する感情） 音楽的教養（音楽に関する教養）

山下（1999）に特徴的なのは、分類3を立てていることから分かるように、「一的」の機能と役割を重視する点である。しかし、分類1の「Aの性質を有するB」と分類2の「AのようなB」との違いは必ずしも明確ではなく、場合によっては、分けにくいことがある。例えば、「文学的表現」は「文学の性質を有する表現」にも「文学のような表現」にも解釈し得るなどである。

2.3. 堀口（1992）の統語法による二分法とその問題点

以上述べた遠藤（1984）、山下（1999）の分類はそれぞれ多少違いがあるものの、いずれも「一的」の意味を考察の重点に置いている点で共通している。それに対し、堀口（1992）では、「一的」が付く結合語の文中における統語的用法の違いから「一的」を考察し、分類している。

堀口（同上）は、江戸時代以降の「一的」の用法の通時的研究に基づき、「一的」の接続を示す助辞「の」に言い換えられる「一的」の用法を「旧式」、現代のような形で「…の性格を有する」を表す用法を「新式」と分類している。また、「新式」はすべて状態性を持つのに対し、「旧式」には状態性を持つ「進歩的」のようなものと状態性を持たない「精神的」のようなものがあると指摘している。堀口（1992：75）の分類は次の通りである。

旧式	{	(イ) 精神的・根本的・例外的	—	非状態性・二セ形容詞
		(ロ) 大々の・確定的・進歩的		
新式	{	(ハ) 日本的・機械的・積極的		状態性・本形容詞

堀口（同上）はまた、「*その鍛錬は精神的だ」「*彼の地位は社会的だ」など、非状態性の

「一的」は終止用法をもたないことから、「ニセ形容詞」と名づけ、「本形容詞」と区別している。

語彙の意味にのみ依存せず、統語的機能から「一的」を分類するという新たな分類方法を提示した点で堀口はすぐれている。しかし、「状態性」と「非状態性」といった用語は紛らわしく、「本形容詞」と「ニセ形容詞」という用語も一般的ではない。また、堀口(1992:73)自身も『『組織的暴力』は、使いようで新式にも旧式にもなるが、その類のものも少なくない。』と認めているように、旧式と新式の間に明確な線を引くことも実は容易ではない。例えば、終止用法を持たない非状態性のニセ形容詞として「例外的」という語が挙げられているが、以下の例で分かるように、「～例外的だ」は終止用法、つまり述語用法として使用することも可能である。

(3) 例外的な措置

(3) 今回の措置は例外的だ。

2.4. まとめ

以上、日本語の接尾辞「一的」に関する先行研究には、「一的」の意味による分類、接続する語基に関する分析が多いことを見てきた。しかし、「一的」は多義的であるため、意味のみに頼る分類には無理があり、網羅的に分類しきれないところが残る。

一方、その中で、注目に値するのは堀口(1992)の分類法である。2.3.で既に検討したように、問題点は残るが、「一的」が付く結合語の文中における統語的用法、つまり終止用法(述語になれるかどうか)を持つか否かによって「一的」を考察しようとする基準は他の先行研究に比べ、より客観的で検証可能と言えよう。

3. 日本語の接尾辞「一的」の意味用法の分析

この節では、「一的」が付く語基の諸特徴、「一的」が付く結合語の文中における用法、「一的」の表す意味と統語的用法の関係を検討する。さらに、近年見られる「一的」の新しい用法などを視野に入れつつ、「一的」の統語的用法・意味・機能の違いをより包括的にとらえられるような新たな分類を試みる。

3.1. 「一的」が付く語基の諸特徴

まず、「一的」が付く語基の語種、品詞性などから見られる特徴を述べ、「一的」が付く語基に課される制約について検討する。

3.1.1. 「一的」が付く語基の語種

「一的」が付く語基の語種、品詞性と「一的」が付く結合語の文中における用法を詳しく見

るために、朝日新聞、毎日新聞、読売新聞の3紙の社説に出てくる「一的」の用例を抽出し、調査を行った¹⁾。全部で延べ語数440語、異なり語数163語を収集した。以下では、この調査のデータを用いることにする。

異なり語数163語のうち、「一的」が付く語基の語種からみると、漢語、和語、外来語が見られる。このうち漢語語基が大多数を占めているが、これについては3.2で「一的」が付く結合語の用法を論じる際に挙げるので省略し、以下では少ないが、和語語基と外来語語基の例を挙げておく。

- (4) 核拡散阻止のNPT体制は、なし崩し的に揺らいでいるのが現状だ。
- (5) 条例はスローガンの内容になりそうだが、…
- (6) 移行政府が発足したイラクもレバノンと同様、種々の民俗・宗教が混在するモザイク的な国である。
- (7) 当時の経済情勢がデフレ的で底割れのおそれがあったためだ。

異なり語数163語の中から、上の和語1語（「なし崩し的」）と外来語4語（「デフレ的」「トラウマ的」「モザイク的」「スローガンの」）を除いた残りの漢語が159語である。漢語の全体における比率は97.5%で、圧倒的多数を占めていることが分かる。また、一字漢語9語、三字以上の派生語と複合語4語を除くと、残り146語はすべて二字漢語で、全体における比率は89.6%である。すなわち、新聞においては「一的」がほとんどの場合、二字漢語と結びつく傾向が見られるということになる。

3.1.2. 「一的」が付く語基の品詞性

水野（1987）は語基をその文法的性格によって、体言類・相言類・用言類・副言類・結合類の五つに分類している。本稿では以下の水野（1987：63）の分類に従い、「一的」が後接する語基について論じていく。

体言類……格助詞「が」を伴って文の要素となる。（近代・化学）

相言類……「な」を伴って連体修飾成分となる。あるいは体言類・用言類・副言類に属さず「の」を伴って連体修飾成分となる。（優秀・最後）

1) 三大新聞社のホームページにアクセスし、朝日新聞2005年5月7日から2005年6月6日まで1ヶ月分、毎日新聞2005年4月24日から2005年6月2日まで40日分、読売新聞2005年5月10日から2005年6月9日まで1ヶ月分を資料とし、社説に出てくる「一的」の用例を検索し、抽出した。

用言類……「する」を伴ってサ変動詞となる。(計画・注意)

副言類……そのままで連用修飾成分となる。(全然・絶対)

結合類……上に挙げた四つの類のどれにもあてはまらず、必ず接尾辞等と結合して用いられる。(積極・合理)

本稿では、名詞を(ア)体言類、名詞であると同時にサ変動詞の語幹としても使われるものを(イ)用言類、「将来の不安」「絶対の自信」の「将来」「絶対」など、「の」を伴って連体修飾語になれるが、主としてそのままの形で連用修飾語になるものを(ウ)副言類、「な」を伴って連体修飾語になるものを(エ)相言類、単独に用いられず、常に他の語と結合して使われるものを(オ)結合類とする。以下では「-的」がつく語基の品詞的特徴について、3.1.1.で述べた新聞社説の調査により得られた例を示す。なお、体言類、用言類は数が多いので、以下ではそれぞれ頻度の高い順に10語のみを挙げ、()内に異なり語数を示す。副言類、相言類、結合類については調査で得られた全ての語例を挙げる。

ア 体言類

悪魔的 外交的 感情的 技術的 結果的 効果的 現実的 軍事的 経済的
基本的 (異なり語数全110例)

イ 用言類

安定的 圧倒的 意図的 強制的 継続的 決定的 建設的 実践的 象徴的
生産的 (異なり語数全43例)

ウ 副言類

将来的 一時的 絶対的 (異なり語数全3例)

エ 相言類

平和的 (異なり語数全1例)

オ 結合類

具体的²⁾ 国際的 自主的 自発的 消極的 積極的 (異なり語数全6例)

このように、体言類・用言類・副言類・相言類・結合類いずれにも付く「-的」の用例が見られる。次に、それぞれの類の語基の占める割合を以下の表1に示す。

表1 新聞社説調査による「-的」が付く種々の語基の割合

体言類	用言類	副言類	相言類	結合類	異なり語数
110 (67.5%)	43 (26.4%)	3 (1.8%)	1 (0.6%)	6 (3.7%)	163語

2) 但し、「具体」は「言語の具体」「具体の姿を忠実に再現する」などのごく少ない例に限られるが、単独で体言的に使うことがある。

表1を見ると、「一的」は体言類・用言類・副言類・相言類・結合類のいずれにも付くが、その中でも体言類が67.5%と大多数を占めていることが分かる。用言類はこれに次ぐ26.4%で、副言類・相言類・結合類の数は1.8%、0.6%、3.7%と低い割合を示す。

3.1.3. 「一的」が付く語基に課される制約

以上、語種と品詞性から「一的」が付く語基の特徴を見てきたが、このうち「な」を伴って連体修飾語になる相言類（形容動詞類）に付いた「一的」が少ないことはすでに3.1.2.で見た通りである。体言に付いて形容動詞の語幹を作るという「一的」の機能から考えると、相言類語基には付きにくいことが予想される。つまり、活用語尾を付けて形容動詞にできるものはそのまま使用し、「一的」は付けないのである。例えば、「确实」「明白」などの形容動詞は、直接「な」とその活用語尾を付けられるので、「一的」は付けない。しかし、すべての形容動詞に例外なく「一的」が付かないというわけではない。形容動詞の中にも、「一的」との結合が許されるものがある。例えば、数は少ないが、「健康」「有効」「平和」などの形容動詞語幹にはさらに「一的」が付けられる。そこで、以下ではどのような形容動詞語幹に「一的」が付きうるのか、また「一的」が付くことにより、どのような意味上の変化がもたらされるのかを考察する。

形容動詞類に「一的」がつくパターンは少ないゆえに、この用法に関する先行研究はそれほど多く見られないが、広田（1969）、山田（1961）、豊田（1980）にはこれについての言及がある。まず、これらの先行研究を見る。

広田（1969：303）には次のような指摘がある。

現代語では「的」のつく形容動詞の語幹は、「経済」「健康」「自然」「神秘」などいくつか限定されているが、明治前期の「的」の用法は、まだそういうきまりが確立していなかった。たとえば、「普通的」「頑固的」「不可思議的」「奇妙的」「破天荒的」「破廉恥的」など、現在使われない形を随所に見かけることができる。

山田（1961：61）では「現代語での的のつきうる形容動詞の語幹は、通俗・永久・変則・経済・健康・神秘・自然・正常・正統などの諸語の範囲に限られるようだ。」と指摘されている。

豊田（1980：92）では、形容動詞語幹にさらに「一的」が付く語を以下のように掲げ、「ここに入る言葉は「的」のついたものが「な形容詞」の語幹にもなるし、「的」を介さずそのまま「な形容詞」としても使われる言葉である。」と説明している。

悪質 悪徳 安易 異質 因果 円滑 婉曲 円満 穏健 確実 過激
過剰 簡潔 簡略 貴重 急激 急速 凶悪 強硬 凶暴 極右 極左
緊急 均等 偶然 健康 堅実 狡猾 高級 豪放 滑稽 孤独 細心
最新 残虐 残酷 自然 従順 重要 神秘 正式 正統 精密 随意
素朴 大量 多様 単独 通俗 適切 特異 特殊 非情 非凡 不変
平凡 平和 未梢 有効 零細 無差別……

豊田（同上）が指摘した「一的」の付き得る形容動词语幹は、広田（1969）と山田（1961）より範囲が広い。しかし、実際に「一的」が付き得る形容動詞の語幹は豊田（同上）に指摘されているほど多いのだろうかという疑問が湧く。

そこで、筆者は富山大学図書館所蔵の朝日新聞社のオンライン記事データベース「聞蔵Ⅱビジュアル」（1984年以降のテキスト記事収録）を検索したが、「一的」が付く形容動詞の語幹は、「有効的」「緊急的」「通俗的」「神秘的」「自然的」「平和的」「健康的」など数語に限られている。以下、それぞれの語に関し、「一的」が付かない場合と比較してみる。

「有効」と「有効的」

- (8) 資源の有効な利用の確保を図る。
- (9) 有効な対策を考えてみる。
- (10) いざという時のためのとても便利で有効的なツールになる。
- (11) これらの土地の有効的な活用手段の一つとして……
- (12) 県民全体の利益になる有効的な活用法を検討中という。

(8) ～ (12) の例を見る限り、「有効な」と「有効的な」とでは意味にあまり違いがなく、相互に置き換えが可能である。

「緊急」と「緊急的」

- (13) 約束の時間に遅れそうな時とか、緊急な連絡を取り合う必要を迫られた場合…
- (14) 公共交通網の整備と拡充は緊急な課題と主張している。
- (15) 緊急な電話がかかっても取れない状態になってしまう。
- (16) 緊急的な措置が講じられることが最重要課題だ。
- (17) 緊急な対策が必要だ。
- (18) 緊急的な対策を取る。

「緊急な」と「緊急的な」は両方とも使用可能であるが、「緊急な」の場合、「緊急な連絡」「緊急な課題」「緊急な電話」「緊急なとき」など、後にくる被修飾語の範囲はより広いようである。それに対して、「緊急的な」は殆どの場合、「緊急的な措置」という表現に限られる。なお、(17)と(18)のように「対策」が被修飾語の場合、「緊急な対策」も「緊急的な対策」もあるが、意味の差はないようである。

「通俗」と「通俗的」

- (19) この作品はせりふの緊張感がなければ通俗的なメロドラマになってしまう。
- (20) 通俗なメロドラマのような物語から、題名どおりの至高の世界へと見る者をいざなう、神秘的な作品だ。
- (21) 大岡昇平は、求めに応じて通俗な物語を書きとばしているうち、…
- (22) 今回は山梨のぶどう農家の主婦を主人公に、あえて通俗な小説に挑んだ。
- (23) これは、しかし、通俗な叙事詩にとどまる作品ではない。

(19)と(20)のように「通俗なメロドラマ」と「通俗的なメロドラマ」のいずれも見られるが、どちらも「あまり高度でなく、一般の人にも分かりやすいさま」という意味を表し、両者の意味上の違いは読み取れない。ただし、(21)、(22)、(23)のような「通俗な物語」「通俗な小説」「通俗な叙事詩」など被修飾語が文学のジャンルを表す語の場合には「通俗な」と表現される例が大部分である。

「神秘」と「神秘的」

- (24) 宇宙、自然、生命など神秘的な世界をテーマに製作した作品約四十点が展示されている。
- (25) 神秘的な雰囲気を漂わせる。
- (26) 古代遺跡の神秘的なムードを追い求め、近畿地方の遺跡を回るようになった。

「神秘的な」と「神秘的な」の意味の差もないように思われる。用例数からみると、「神秘的な」より「神秘的な」のほうが多い。

「自然」と「自然的」

- (27) 高山植物の咲き乱れる所が多いという自然的な要素が背景にあったようだ。
- (28) 雪解け水で増水し流されるなど、自然的な要因だとされた。
- (29) 目元だけを目立たせず、全体のバランスを考えて自然な印象を持たせる。
- (30) こうなるのも自然な成り行きだ。

(27) の「自然的な要素」は、「自然に関する要素」、(28) の「自然的な要因」は「自然に関する要因」と解釈できる。「わざとらしさや無理のないさま」を表す (29)、「当然」の意味を表わす (30) と意味が違うことが分かる。

「平和」と「平和的」

- (31) 核兵器を無くし、平和な世界を実現しよう。
- (32) 平和な社会が病気を減らし、豊かさをもたらす。
- (33) 原子力の平和的な利用が重要だ。
- (34) 平和的な解決をはかっていく。

「平和な」と「平和的な」では、意味が異なる。「平和な」は「戦争や紛争がなく、世の中が穏やかである」状態をいい、「平和的な」は「あまり過激でない、穏健である」ことを表す。

「健康」と「健康的」

- (35) 健康な体は何よりです。
 - (36) ? 健康的な体は何よりです。
 - (37) ? それは健康なスポーツだ。
 - (38) それは健康的なスポーツだ。
 - (39) * 健康な雰囲気に包まれる。
 - (40) 健康的な雰囲気に包まれる。
- (35) ~ (40) は筆者による

「健康な」と「健康的な」の表す意味もまた異なる。「健康な」は「健康状態のよい」ことを表すのに対し、「健康的な」は「健康によい」ことを表す。

水野 (1987: 66) は「健康」と「健康的」がそれぞれどのような被修飾語と結びつきうるかについて次のような表を示している。

表2 「健康」と「健康的」の使い分け

被修飾語 修飾語	胃腸	体	人	顔	歌声	雰囲気
健康な	○	○	○	?	?	×
健康的な	×	?	○	○	○	○

この表によれば、「健康な」は身体器官・身体部位など具体的なものを修飾し、「健康的な」はより抽象的なものを修飾することが分かる。被修飾語が「人」の場合、「健康な人」と「健康的な人」いずれも可能であるが、「健康な人」は「心身とも病気の無い」、「健康的な人」は「外見からみて健康に見える」という意味の違いがある。

以上から、形容動詞語幹に「-的」が付く場合、意味が変わらないものと意味が変わるものがあることが分かる。

- (41) a. 形容動詞語幹に「-的」が付いても、意味の変化がないもの
 「有効的」「緊急的」「通俗的」「神秘的」
 b. 形容動詞語幹に「-的」が付くと、意味の変化があるもの
 「自然的」「平和的」「健康的」

3.2. 「-的」が付く結合語の文中における用法

以下では「-的」が付く結合語が文中でどのような振る舞いをするかを見ていく。前節で述べた新聞社説に見られる「-的」の付く結合語の延べ語数440語それぞれの用例数と比率は表3の通りである。

表3 「-的」が付く結合語の文中における用例数と比率

「-的」の用法	①「-的」な+n	②「-的」+n	③「-的」+に	④「-的」+だ	⑤その他
用例数	170	95	143	12	20
比率	38.6%	21.6%	32.5%	2.7%	4.5%

①～⑤の用法のうち、①「-的な+体言」、②「-的+体言」、③「-的に」の用例数は多い。①と②は、後接名詞の連体修飾語として機能している点において同じである。この二つの連体修飾用法が全体の60.2%を占めることから、「-的」が付く結合語の主要な用法は、連体修飾名詞句の構成であることが分かる。また、③の「-的に」の形が32.5%と比率の高いことも注目される。

以下、一般形容動詞と比較しつつ、表3に挙げられた「-的」の各用法を分析する。

①「-的な」+体言

これは、「な」を伴って後接する体言を修飾あるいは限定し、形容動詞としてふるまって連

体修飾語となる最も一般的な用法である。

(42) それが現実的なやり方だ。

(43) 多面的な研究を急ぎたい。

(44) 条例はスローガ的な内容になりそうだというが、…… (＝5)

②「-的」+体言

この用法では、「-的」が「な」を介さずに連体詞のように直接後ろにくる体言を修飾する。この用法も数が多く、一般的な用法と言える。

(45) 鉄道は社会的使命を改めて確認することが急務だ。

(46) 女性にとって結婚や育児は絶対的価値から滑り落ち、……

(47) 男性にとっても、个性的おしゃれを楽しむチャンスだ。

一方、「-的」の付かない形容動詞の語幹には、「精密検査」「精密機械」「簡単節約法」など、体言を直接繋ぐ用法が全くないわけでもないが、一般的ではない。この点は一般の形容動詞と異なるところである。

ところで、遠藤(1984:134)は①の「-的な+体言」の形を「ナ型」、②の「-的+体言」の形を「ゼロ型」としている。「ナ型」も「ゼロ型」も後接する体言を修飾、限定する機能を果たすという点においては、変わりはない。「ナ型」と比べて、「ゼロ型」は表現が簡潔で、語感が固い。両者の違いは語感のニュアンスの違いによると認められているが、文脈においてどんな時に「ナ型」を使い、どんな時に「ゼロ型」を使うべきかにはまだ規則らしいものは見出されていない。

今回の筆者の調査では、「ナ型」が「ゼロ型」より多いことが観察された。今回収集した例文から考察すると、「ナ型」と「ゼロ型」の使い分けについては、以下のa～dのような特徴が見られる。

a. 被修飾語が形式体言である時、「ナ型」をとる。

(48) 違法かつ困難な作業を通じて初めて引き起こしうるといった抽象的なものにとどまる。

(49) 教育のIT化は画一的なことをやるためにあるのではなく、……

b. 被修飾語が一字の漢字で表される語である時、「ナ型」をとることが多い。

- (50) 移行政府が発足したイラクもレバノンと同様、種々の民族・宗教が混在するモザイク的な国である。
- (51) この間、ブッシュ政権は新中東平和案「ロードマップ」を作成したものの、流血の連鎖に実効的な手を打てなかった。
- (52) 特許庁のホームページには、商標の登録ができない一般的な例が載っている。
- (53) 「特別な病」から「一般的な病」になり、エイズがまん延しているのも現実だ。

c. 「-的」の派生語の後にさらに限定語がある時、「な」は省略できず、「ナ型」をとる。

- (54) 官僚経験者の起用に否定的な小泉首相の意向も働いたとはいえ、……
- (55) 体系的な出動のシステムが整備されているかどうか、初動段階の効果を左右する。

(54) の「否定的な」は体言「意向」にかかるが、「な」は省略されると、「否定的」が「小泉首相」にかかってしまうため、「ナ型」をとらなければならない。(55) においても、「体系的な」は体言「システム」にかかるため、「な」は省略できない。ただし、「体系的出動システム」のように「な」も「の」も省略されると自然になる。

d. 「-的」の派生語と被修飾語の結び付きが強く、いつもゼロ型で現れるものがある。

「公的年金」「敵対的買収」「基本的人権」「集団的自衛権」など。

③ 「-的に」+用言

「-的に」は形容動詞の連用形（連用二型）と見なされ、後にくる用言を修飾する働きを持つ。この用法は例が多く、連用修飾語になる点で一般形容動詞と変わりがない。

- (56) 外の世界では体験できないような隊内での二十歳前後の日々を、躍動的に描いた。
- (57) 1400人余の700万語以上の話し言葉を調べると「ニホン」が圧倒的に多かった。

④ 「-的」+だ（である）

これは一般形容動詞と同じように、文の述語になる用法である。

(58) 少子化の流れを人為で変えるのはほとんど絶望的だ。

(59) 区は保育所でのゼロ歳児受け入れには消極的だ。

⑤その他の用法

その他の用法としては、「-的+で」の並列用法と中止法、「-的すぎる」の形容動詞のいわゆる語幹用法、「-的、-的な」の並列用法などが挙げられる。

(60) 日本側は金融の自由化に消極的で、さしたる成果もないまま終わってしまった。

(61) 新しい商標にするには、あまりにも一般的過ぎると見過ごしてしまうかもしれない。

(62) 国連への財政的、軍事的、外交的な貢献を考慮する。

(63) 社会的・経済的影響も考慮する。

(64) すべての人民の経済的及び社会的発達を促進するために……

(65) 身体、知的、精神と障害ごとの縦割りがなくなるのは評価したい。

(60) (61) はいずれも一般形容動詞にも見られる用法であるが、(62) (63) は、一般形容動詞に「平穏無事な生活」「簡単明瞭なもの」などに見られるように、この並列用法が全然ないわけでもないが、数が限られている。

なお、その他の用法のうち、注意すべきなのは、「比較的」という語の用法である。「比較的」は普通の「-的」の派生語とは異なり、ほとんどの辞書で副詞として扱われている。

(66) 認知症を患っても、昔のことは比較的よく覚えている。

(67) 米国などの反応は比較的静かなものだった。

(68) 今回の被害は比較的小さいようなので、早く営業再開したい。

これらの例で示されたように、「比較的」は用言「よい」「静か」「小さい」を修飾し、そのままの形で副詞として機能する。述語用法の「比較的だ」、連体修飾用法の「比較的な」などの活用形は持たない。「比較的」という語はすでに語彙化され、その中から「-的」の意味を抽出するのは難しい。しかし、例外的に「比較的に」の形も筆者の調査で見られた。

(69) 比較的に財政力のある都市部では、粗大ゴミなどを除けば依然、住民サービスとして、無料の自治体が少なくない。

(69) の「比較的に」は母語話者にとっては不自然な形である。ただし、ここでは「財政力」

が「比較的」に直接繋がることにより、連体修飾語としてとられることを避けるために、「に」をわざわざ挿入しているのではないかと考えられる。ちなみに、梁 (2004:109) でも (70) (71) のように新聞における「比較的に」の用例が挙げられている。

(70) 今年は日本に近い海域での発生が多く、発達する間がないため、比較的に勢力が弱かった。

(71) 今の日本人の勘違いのひとつに、牛、豚肉を毎日のように食べるようになったのは比較的に最近であるということだ。

(70) (71) も (69) 同様に「比較的勢力」「比較的最近」というかかり方を避けるために使われたものと考えられる。

副詞として使われ得る「-的」の結合語として、もう一つ「可及的」が挙げられる。

(72) 可及的速やかに対応を協議し、適切に対処してまいりたい。

「可及的速やかに」という表現は慣用句になっているが、「可及的な」「可及的だ」「可及的に」のような用法はないため、「可及的」は副詞であると考えられる。単独で副詞として用いられる点では「比較的」と似ていると言える。

以上、「-的」の派生語の用法と機能を考察した。一般に「-的」は体言に付き、形容動詞の語幹を作る接尾辞とされるが、上例を見て分かるように、「-的」の派生語は形容動詞の語幹として振舞うだけでなく、一部の語に限られるものの、副詞的にも振舞うことが分かった。また、典型的な形容動詞には七つの活用形（未然形「だろう」、連用形「で」、「に」、「だっ」、終止形「だ」、連体形「な」、假定形「なら」）が揃っているのに対し、「-的」の派生語には未然形と假定形の用例があまり見られないことも観察された。

「-的」の機能に関して、水野 (1987) は「-的」を相言化機能を持つとし、加納 (1991) は「-的」をAJN化機能を持つとしている。相言化機能もAJN化機能も、形容動詞化を指していることは言うまでもない。

以上の考察から、「-的」が各種の語基と結合する場合の機能を表4にまとめる。

表4 「一的」が各種の語基と結合する場合の機能

語基	体言類	用言類		副言類	相言類	結合類
語例	現実的 理論的	圧倒的 徹底的	比較的	将来的 絶対的	健康的 平和的	積極的 具体的
結合語の品詞	相言類	相言類	副言類	相言類	相言類	相言類
「一的」の機能	相言化	相言化	副言化	相言化	品詞転換機能なし	相言化

3.3. 接尾辞「一的」の意味と統語的用法の再検討

前節では「一的」の結合語の文中における用法を検討したが、次に、堀口（1992）の分類法に基づき、「一的」の表す意味と統語的用法の関係を論じてみたい。

3.3.1. 「一的」が付く結合語の統語的用法

「一的」が付く結合語の主たる統語的用法を再度整理すると、以下のようになる。

(73) 「一的」が付く結合語の主たる統語的用法

- ① 「な」を後接し、連体修飾語になる。(一的な～)
- ② 「体言」を後接する。(A的B)
- ③ 「に」を後接し、連用修飾語になる。(一的に～)
- ④ 述語になって、文を終止する。(一的だ)

つまり、「一的」には、①と②の連体修飾用法、③の連用修飾用法、④の述語になる用法がある。このような用法を持つことにより、「一的」が語基の品詞性を変え、形容動詞化する機能を果たすことを前節で論じた。しかし、「一的」の付くあらゆる結合語が①から④までの機能を果たせるわけではない。一部の活用形を欠く語があり、その用法には非均質性が見られる。堀口（1992）では、「一的」のつく結合語が文脈の中で終止用法「一的だ」で言い換えられるかどうかを基準として「一的」の用法を論じている。例えば、以下のような例が挙げられる。

(74) 軍事的設備

(74') *この設備は軍事的だ。

(74'') この設備は軍事的なものだ。

(74)の「軍事的設備」は(74')の「*この設備は軍事的だ。」には変換不可能であるが、(74'')「この設備は軍事的なものだ。」のように、何か成分を補えば成立する。つまり、「軍事的」は述語

になる用法を持たないのである。この意味で、「軍事的」は本形容詞ではなく、状態性を持たないニセ形容詞であると堀口（1992）は指摘している。これに対し、

(75) 積極的なやり方

(75') そのやり方は積極的だ。

のような言い換えは可能であることから、「積極的」は活用形が備わっている状態性を表す本形容詞であるということが出来る。要するに、「-的」の付く結合語はその統語的機能にばらつきが見られるのである。

3.3.2. 「-的」の表す意味と統語的用法の関係

3.3.1.では、終止用法の「-的だ」に言い換えられる「積極的」の類と、終止用法の「-的だ」に言い換えられない「軍事的」の類があることが分かった。では、この統語的用法の違いと「-的」の表す意味との間にどのような相関性が見られるのだろうか。以下、宇佐見（2001）の論述を参照しつつ、「-的」の表す意味と統語的用法の関係を探り、「-的」の統語的用法・意味・機能の違いを包括的に説明できるような新たな分類を試みたい。

宇佐見（2001：245）では、堀口の言う終止用法による言い換えができるかどうかを基準に、「-的」に関する先行研究の中で代表的な山下（1999）と遠藤（1984）の分類を再検討している。遠藤（1984）の分類は既に（1）として検討したが、ここで再度（1'）としてまとめる。

- (1') 1. 芸術/数学的な才能
- 2. 病的な神経
- 3. 圧倒的な勝利
- 4. 職業的軍人

宇佐見（2001：245）では（1'）の遠藤の分類に対し、「-的」の終止用法への言い換えが可能かどうかを（1''）のように検討している。

- (1'') 1. 私の才能は？芸術的/*数学的だ。
- 2. あいつの神経は病的だ。
- 3. その勝利は圧倒的だった。
- 4. *その軍人は職業的だ。

また、山下（1999）の以下の（2'）の分類に対し、宇佐見（2001：245）では同じく「一的」の終止用法への言い換えが可能かどうかを判断し、（2''）のように検討している。

- (2') 1. 慢性的資金不足
 2. 家族的雰囲気
 カリスマ的指導者
 3. 音楽的教養
 宗教的感情

- (2'') 1. 資金不足は慢性的である。
 2. あそこの雰囲気は家族的だ。
 あの店の指導者はカリスマ的だ。
 3. *彼の教養は音楽的だ。
 ?その感情は宗教的だ。

上記の宇佐見の分析（1''）と（2''）で分かるように、遠藤の(1')の2と3の「～のような」「～の状態である」の意味で使用される「一的」は「一的だ」に言い換えられるが、1と4の「～に関する」「～としての」の意味で使用される「一的」は終止用法を持たない。山下の例では、（2'）の1と2「～の性質を有する」「～のような」の意味で使われる「一的」は終止用法を持つが、3の「AにおけるB」「AとしてのB」「AについてのB」「Aに対するB」などの意味で使われる「一的」は述語になれないか、あるいはなりにくい。以上の考察から、「一的」の意味と統語的用法の関係は、次のように終止用法を持つか持たないかで大別できる。

表5 「一的」の意味と統語的用法の関係

「一的」の意味	語例	終止用法
～の性質を有する ～の状態である ～のような	積 極 的	○
～に関する ～としての ～についての	軍 事 的	×

さらに「一的」の意味、用法と機能を詳しく分類すると、次の表6のようになる。

表6 「一的」の意味・用法・機能の分類

活用形 語例	連体修飾 「的な」	連用修飾 「的に」	述語用法 「的だ」	「一的」の意味	「一的」の機能
積極的	○	○	○	～の性質を有する	属性の付加
軍事的	○	○	×	～に関する	カテゴリーの規定

このように、「一的」の意味、機能とその統語的用法には相関性が見られる。すなわち、「～の性質を有する」の意味を表し、属性の付加的機能を持つ「積極的」の類は、連体修飾用法、連用修飾用法、述語用法いずれでも用いられるのに対し、「～に関する」の意味を有し、カテゴリーの規定的機能を果たす「軍事的」の類は、連体修飾用法と連用修飾用法は持つが、述語用法を持たないのである。

3.4. 「一的」の新しい用法について

次に、近年出現した「一的」の新たな用法について見ていく。新たな用法とは、以下の例のように「一的」が人称代名詞、固有名詞、和語一般名詞などに付き³⁾、文中で「一的には」の形で副詞句として機能する用法である。

- (76) わたし的には良いと思ったんですけど、
- (77) 小林さん的には何がいいんですか。
- (78) 気持ち的にはかなり楽である。しかし、体力的には相当きつい。
- (79) サービス内容やお金的には、あまり差はなかったのですが…
- (80) 暮らし的には変わりが無い。
- (81) 指的には簡単かもしれないけどリズムを刻むのって結構難しいですね。
- (82) この服は長さ的にはちょうどよい。

これら「一的」の新たな用法は非難を招いているようである。「一的」の新たな用法に対し、違和感を覚える人が多いのであろう。また、「ぼかしことば」「曖昧表現」と捉える人もいる(北原 2004)。現時点では、これらの表現が俗語的場面に限って使用されており、まだ確立した用法とは言えないためか、「一的」の新しい用法を扱う先行研究は少ない。ここでは「一的」の

3) この種の新しい用法の中には、「うちの会社的には問題ないんだけど～」「それは学校的にはもっともだけど～」といったように、「漢語名詞+的には」の表現も見られる。

新しい用法を単なる「ぼかしことば」と考えず、従来の「一的」の用法との関連において、一体なぜこのような使い方が広まったのか、「一的」の新しい用法を生み出す言語学的要因とその必然性を考察したい。

3.4.1. 従来の用法との意味・用法における関連性

(76) ～ (82) のような「一的」の新しい用法と従来の「一的」の意味用法との関連を考えてみたい。まず、副詞用法「一的に」の形は従来の「一的」の用法に見られるが、新しい用法で使用される「一的」と従来の用法との関連性を解き明かすため、「一的」の副詞用法をもう少し詳しく見てみたい。小出(2004:7)は、副詞用法「一的に」の意味区分を以下のように規定している。

(83) 「一的に」の副詞用法の意味区分

A. 様態を示す 「Yのされ方がXの性質を帯びている」

- ① 日本的に行われる政治
- ② 独裁的に支配する
- ③ 平和的に解決する

B. 評価を示す 「Yについて評価すると、それはX的だ」

- ④ 例外的に扱う
- ⑤ 全国的に人気がある

C. 観点を示す 「Xの視点から見てYだ」

- ⑥ 形態的に美しい
- ⑦ 経済的に無理がある

(83) で示されている小出(同上)の分類の妥当性は議論のあるところであるが、特にBの「評価を示す」という区分には無理があるように思われる。「とくにAとBは明確な境界を持っているわけではない」と小出(同上)も認めている通りである。とはいえ、小出(同上)の分類の妥当性はともかく、ここで注目したい点は、AとCの意味区分である。Aの「様態を示す」という意味はまさに従来の「一的」の「属性の付加的用法」に、Cの「観点を示す」という意味は「範囲・カテゴリーの規定的用法」に当てはまることが分かる。「範囲・カテゴリーの規定」用法は以下の例にも見られる。

(84) 生物学的には、動物は将来のためよりも、現在目の前の利益を得る方を選ぶとされています。

- (85) 内容的には難しくはないのだが、耳慣れない数学用語が氾濫していて、とても難しく感じる人もいるだろう。

ここで「-的」の新しい用法について考えてみると、「わたし的には」は「わたしとしては」の意味を表わし、「気持ち的には」は「気持ちの上では」、「お金的には」は「お金の面では」、「暮らし的には」は「暮らしに関しては」の意味を表すというように、次に述べる事柄の範囲を限定するという意味を表わすものである。これを従来の用法と比較してみると、新しい用法は、「観点を示す」「範囲・カテゴリーの規定」のような意味を表わす「-的」の従来の用法から拡張して用いられたものであることが分かる。新しい用法で使用される(76)～(82)の「-的には」は従来の用法で使われる(84)(85)と比較してみると、副詞用法「-的には」という形態的特徴にしても、「範囲・カテゴリーの規定」という意味的特徴にしても、何ら変わりがないように思われる。この「-的」の用法の新しさは「-的」に前接する語基の品詞性(人称代名詞・固有名詞)・語種(和語)に見られるのである。従来、「-的」は漢語名詞に付いて形容動詞を作る接尾辞であった。以下の例を参照されたい。

(86) 金銭的には不自由しない。(「漢語語基+的」の従来の用法)

(87) お金的には不自由しない。(「和語語基+的」の新しい用法)

(例86, 87は北原編2004:73による)

(88) 気分的には楽である。(「漢語語基+的」の従来の用法)

(89) 気持ち的には楽である。(「和語語基+的」の新しい用法)

(86)が(87)より、(88)が(89)より許容度が高いのは、「-的」の前接する語基が漢語か和語かの違いによるものである。「金銭的には不自由しない」「気分的には楽である」などのように、漢語に「-的」をつける言い方は認められていて、それが漢語でない和語語基に拡張されたのが「お金的には不自由しない」という言い方である。このように見てみると、「-的」の新しい用法は一見奇異に感じられるだろうが、「-的」の本来の意味と用法からすると、決して偶発的なものではなく、従来の用法を受け継いでおり、本来の「-的」の意味用法からも外れていないと言ってよい。

3.4.2. 新しい用法における「-的」の意味的特徴と形態的特徴

新しい用法における「-的」は、総じて「-的には」の形で文中において副詞として使われ、「観点表示」「範囲・カテゴリーの規定」という意味を表わすことは上述の通りである。とはいえ、「人称代名詞+-的」のパターン(「わたし的には」の類)と「(その他の)和語+-的」のパターン(「気

持ち的には」の類)との間には微妙な違いがあるように思われる。これについてより詳しい考察を行うために、以下の(90)のように改めて例文を示し、(91)のような基準を立てて「-的」の文法性についてテストしてみる⁴⁾。

(90) a. わたしのにはそれが一番いい方法だと思う。

(「人称代名詞+的」のパターン)

b. 気持ち的には理解できる。

(「(その他の) 和語+的」のパターン)

c. 長さ的にはちょうどだけど幅が足りない。

(「(その他の) 和語+的」のパターン)

(91) 分析基準

1. 文中の「-的に」をはずすことができるかどうか。
2. 「-的だ」の終止用法、つまり言い切りの述語用法を持っているかどうか。
3. 「-的な」の連体修飾用法、つまり形容詞用法を持っているかどうか。
4. その他のどんな言い換え表現があるのか。

(91)の基準によって分析して得た結果を以下に示す。まずは分析基準1についての結果である。

(92) a. わたしはそれが一番いい方法だと思う。

b. 気持ちは理解できる。

c. 長さはちょうどだけど幅が足りない。

(91)の分析基準1でテストしてみると、(90)のa, b, cとも(92)のように「-的」をはずすことが可能である。但し、「-的」をはずしてしまう(92)の表現は直接的な表現となり、「私は～」というのは文字通りの一人称である本人の意見を表明したものと捉えられるが、「わたしのには～」は「他の人はともかく、わたしとしては～」の意味を表わし、『一人称の自分』を客観的・冷静に眺めて、意見表明しているようなニュアンスになる。

次に、(91)の分析基準2によってテストした結果が(93)である。

4) 「小林さんのには」のような「固有名詞+-的」のパターンは「人称代名詞+-的」の文法的特徴を有しているため、ここでは特に取り上げないことにする。

- (93) a. *その考え方はわたしの的だ。
 b. *そのような理解は気持ち的だ。
 c. *その変化は長さ的だ。

(93) の a, b, c いずれも不適格文である。つまり、新しい用法で使われる「-的」は述語用法を持たないのである。

続いて (91) の 3 の分析基準, すなわち「-的」の新しい用法は「-的な」の連体修飾用法を持っているかどうかについての結果は以下の通りである。

- (94) a. *わたしのな考え
 b. 気持ち的な問題
 c. 長さ的な変化

(94) a は不適格であるが, b, c は成立する。「気持ち的な問題」は「気持ちの問題」で、「長さ的な変化」は「長さの変化」の意味である。

最後に、「-的には」の言い換え表現を考える。

- (95) a. わたしとしてはそれが一番いい方法だと思う。
 b. 気持ちの上では理解できる。
 c. 長さに関してはちょうどだけ幅が足りない。

a の「わたしのには」は「わたしとしては」に言い換えられるが、「わたしの上では」「わたしに関しては」とは言わない。b の「気持ち的には」と c の「長さ的には」は「気持ちの上では」「長さに関しては」に言い換えられるが、「気持ちとしては」「長さとしては」と言い換えるのも可能である。

以上の「-的」の新しい用法に関する考察と分析を次の表 7 にまとめることができる。

表 7 「-的」の新しい用法の分類

活用形 語例	連体修飾 「-的な」	述語用法 「-的だ」	「-的」の意味	「-的」の機能
わたしのには	×	×	～としては	観点表示
気持ち的には 長さ的には	○	×	～の上では ～に関しては	範囲・カテゴリー の規定

以上、「一的」の新しい用法の特徴をまとめると、次のようになる。

- (96) 1. 人称代名詞・固有名詞・和語一般名詞に付く。
2. 「～的には」の形で文副詞として機能する。
3. 「一的に」の脱落が許される。
4. 述語用法を持たない非状態性のニセ形容詞である。
5. 「観点表示」「範囲・カテゴリーの規定」の働きをする。

以上、新しい用法における「一的」の意味的特徴と形態的特徴を分析することにより、「一的」の新しい用法が広まった言語学的要因を考察した。山田（1961：61）では、「的ということばが現代語で多用されるようになった根本の原因は、日本語に本来の形容詞が乏しいという事情が底流にあるのであるが、接尾的要素としての漢語の生産力の大きいことをわすれてはならない。」と述べている。「一的」の本来の意味と用法、漢語系接尾辞としての造語力の高さからみると、「一的」の新しい用法の出現は何ら不思議な現象ではないのである。

4. まとめ

本稿の考察により、以下のことが明らかになった。

新聞社説に出てくる「一的」の用例調査によって、現代日本語における「一的」はほとんど二字漢語と結びつくこと、「一的」の前の語基が体言類・用言類・副言類・相言類・結合類のいずれもあるが、その中で体言類が大多数を占めていること、「一的」が付く結合語の主要な用法は、連体修飾名詞句の構成であることのほか、連用修飾語、述語になることが明らかになった。

また、「一的」の分類に関して、述語用法を持つか否かという客観的に判断できる統語的基準により、述語用法を持つ「積極的」の類と、述語用法を持たない「軍事的」の類に二分類し、前者は「～の性質を有する」の意味を表し、属性の付加的機能を果たし、後者は「～に関する」の意味を有し、範囲・カテゴリーの規定的機能を持つことが明らかになった。

さらに、近年見られる「わたし的には」「気持ち的には」などの「一的」の新しい用法を取り上げ、従来の「一的」の意味用法との関連性を論じ、その形態的特徴と意味的特徴を分析した。「一的」の新しい用法は決して偶発的に出現した現象ではなく、従来の用法である「範囲・カテゴリーの規定的用法」という意味の「一的」の延長線上にあり、本来の意味用法から外れていないという結論を導いた。

参考文献：

- 宇佐見英美子（2001）「接尾辞『一的』について」『津田塾大学紀要』33, pp. 239-261 津田塾大学紀要委員会
- 遠藤織枝（1984）「接尾語『的』の意味と用法」『日本語教育』53, pp. 125-138 日本語教育学会
- 加納千恵子（1991）「漢字の接尾辞的用法に関する一考察（4）——AJN化機能を持つ漢字について」『文芸言語研究 言語篇』20, pp. 43-59 筑波大学文芸・言語学系
- 北原保雄編（2004）『問題な日本語』大修館書店
- 小出慶一（2004）「接辞「～的」の新しい用法 ——「～的には」という用法について——」『群馬県立女子大学国文学研究』24, pp. 1-14 群馬県立女子大学国語国文学会
- 桜井光昭（1964）『「名誉の」と『名誉な』』『口語文法講座3』pp. 34-44 明治書院
- 陳誼（1999）「日中両国語における『一的』について」国語語彙史研究会編『国語語彙史の研究 十八』pp. 329-350 和泉書院
- 豊田豊子（1980）「漢字構成の『な形容詞』（形容動詞）』『日本語学校論集』7, pp. 85-98 東京外国語大学外国語学部附属日本語学校
- 原由起子（1986）「一的 ——中国語との比較から」『日本語学』5-3, pp. 73-80 明治書院
- 広田栄太郎（1969）「『的』という語の発生」『近代訳語考』pp. 281-303 東京堂出版
- 藤居信雄（1957）「『的』ということば」『言語生活』第71号, pp. 71-76 筑摩書房
- 藤居信雄（1961）「『的』の意味」『言語生活』第119号, pp. 80-83 筑摩書房
- 堀口和吉（1992）「助辞『的』の受容」『山辺道』第36号, pp. 59-76 天理大学国語国文学会
- 水野義道（1987）「漢語系接尾辞の機能」『日本語学』6-2, pp. 60-69 明治書院
- 山下喜代（1999）「字音接尾辞『的』について」『日本語研究と日本語教育』（森田良行教授古希記念論文集刊行会）pp. 24-38 明治書院
- 山下喜代（2000）「漢語系接尾辞の語形成と助辞化——『的』を中心にして——」『日本語学』19-11, pp. 52-64 明治書院
- 山田巖（1961）「発生期における『的』ということば」『言語生活』第120号, pp. 56-61 筑摩書房
- 梁高峰（2004）「文学作品に見る接尾辞『的』の使用実態」北京日本学研究中心編『日本学研究』14, pp. 99-114 学苑出版社

資料：

- 朝日新聞社説（2005. 05. 07～2005. 06. 06）
- 毎日新聞社説（2005. 04. 24～2005. 06. 02）
- 読売新聞社説（2005. 05. 10～2005. 06. 09）

* 本稿は、平成18～19年度の大学院人文科学研究科の「言語学演習」の授業の中で、趙が呉人の指導ならびに研究協力を得ておこなった中国語「的」の日本語への受容と改編に関する研究の成果の一部である。投稿にあたっては、問題となる点などにさらに両方で検討を加え、推敲を重ねた。